



連載の解説版「もう一つの『発達の中の煌めき』」は、こちらから見ることができます。
最新の第16回を公開中!

発達の中の

煌めき

第II部

発達の共感が創り出す実践

——歴史に学び、今をみつめ、
未来を創る

白石正久 白石恵理子

しらいし まさひさ / 1957年、群馬県生まれ。小児科
病院の発達相談員などを経て、現在龍谷大学名誉教授。

しらいし えりこ / 1960年、福井県生まれ。大津市
発達相談員などを経て、現在滋賀大学教育学部教授。

第11回 自分を解き放つ歓びをすべての人に

前号（一月号）では、二〇一二年の放課後等デイサービス制度化以前に、各地で障害児の放課後を豊かにするための運動があったことを述べました。親、教師、指導員、学生、行政等が力を合わせ、放課後の場づくりをすすめるなかで、障害のある子どもたちだけではなく、ボランティアでかかわっていた学生たちも育っていったこと、その若い学生の育ちに親も関与していたことを述べました。

親が若い世代を変える力をもつのは、親自身もまた、何度も何度も自分自身をつくりかえてきているからではないでしょうか。連載第II部の五月号で紹介した、療育で「はじめの一步」を踏み出した親子の姿を覚えてらっしゃいますか。「はじめの一步」から、その後の就園、就学、放課後、卒業……とライフサイクルの歩みのなかで、子どもだけでなく親もたじろぎながら一步、また一步と足を踏み出していくのです。そこで、他の親や社会とつむぎあつて、親もまた一人の人間としてかけがえない育ちをしていきます。それが、若い世代を育てることにつながっていったように思います。

親も発達する

糸賀一雄は、発達するのは障害のある子どもだけではない、職員も親も地域も行政も発達するのだと述べています。

『福祉の道行』の終章に「親の心構え」と題した文章があります。そのなかで、戦争で夫を亡くし、遺された子どもに障害があることがわかり、一緒に死んでしまいたいと思ったこともある母親が、何とかもちこたえて「ようやくここ（近江学園）に預けることができてありがたい」と涙ながらに話したことが紹介されています。母親は、その後、親の会の中心メンバーになり、同じ悩みをもつ親たちと共に勉強し、やがて先輩格として文部省や厚生省（当時）に陳情に出かけたりといろいろな社会的な働きをしていきます。「そういう段階になると、母はもう自分自身の悲しみを通り越し、もっと広い意味の子どもたちのしあわせのためにという、積極的な気持がもてるようになっていたのであった」と糸賀は述べます。そして、「もしあの子がいなかったら、私はじつに平々凡々な生活を過ごしていたにちがいありません。あの子がいてくれて、今、なにか私自身がちが

った目で、しかも深く、世の中を見るようになりました。世の中とはこんなものであったかと、驚きや喜びをもって見ることができました。また多くのひとと友だちになることができました。非常に排他的な自分であったことを思い出すのですが、いまはそうではありません」という母親の言葉を紹介しています。

さらに糸賀は、この母親の変化に、「人間というものは、必ずしもそのようにすすりしたものではないかもしれない。今朝のすすりした姿が、夕方には悩みにも変わるかもしれない」とつづけ、それでも「私たちはなにか新しい目が開かれつつ進んでいくものだという 것도否定できない」と書きます。表面的にみれば一進一退、ときに後ろ向きに見える姿も見せながら、奥深いところで「新しい目」が開かれている。それは、すべての人の発達に共通の道行であるし、奥深いところでの「新しい目」とは、社会に開かれた目なのだと考えます。

糸賀の文章からさらに引用すると、「親自身が漠然とした状態のなかから、はっきりとした状態に個性化していく。親自身が、親のはたらきをだんだん社会的にひ

ろげていったということであろう」、「このような親の自覚と活動が、この子らにたいする国や地方自治体の政策や施策を推進するのに大きな力となることは、いうまでもない」と述べます。そして、「人として生きる権利があるばかりでなく、その発達が保障されるべきだということを知った」親たちが、「手をつないで、この保障の具体的な技術的な方策を一步、一步、おし進めることこそが、世の中の人びとのためにも新しい世界を切り拓くことになるであろう」と結びます。

この子が自分で決めた

「漠然とした状態のなかから、はっきりとした状態に個性化していく」というのは、「子どもの痛みは私の痛み」と感じるような一体化した状態から少しずつ少しずつ、「この子にはこの子の思いがある」「この子の人生はこの子自身のものだ」と悟っていくプロセスとも重なるように思います。障害の有無にかかわらず、親子が一体化した状態は、子どもにとって絶対的な安心感なのですが、そのなかで子どもは、個として育つ準備をしていきます。そして、親も子も、社会に一步ずつ踏み出すことで、それぞれに自